

## 平成25年度 新宿区多文化共生まちづくり会議

### 第5回「災害時における外国人支援の仕組みづくり」部会 議事概要

日 時 平成25年11月6日（水）10:00～12:00

場 所 しんじゅく多文化共生プラザ 多目的スペース

出席委員 稲葉委員、森田委員、金 朋央委員、江副委員、太田委員、鈴木委員、二瓶委員、  
丁委員、イーイーミン委員、バーバー委員 10名

欠席委員 毛受委員、曹委員、魚見委員、朝倉委員、勝村委員、金 根熙委員 6名

- 1 開会
- 2 第4回部会及び第2回ワーキンググループの振り返り
- 3 避難場所・避難所・一時滞在施設の違について

事務局より、地域防災計画上の避難場所・避難所・一時滞在施設について、新宿区避難場所地図等を資料に説明を行った。

- 4 大久保特別出張所地域本部における避難所運営訓練について

大久保特別出張所長より、平成17・18年に大久保特別出張所の地域本部において行った避難所訓練の事例紹介を行った。

- 5 発災以降の取組みについて

#### (1) 避難所周知案内について

- ・新宿区避難場所地図はどのように配布しているか。

⇒新宿区避難場所地図は新聞折り込みで各戸配布のほか、区役所窓口での配布、ホームページで公開している。来年の3月に作り直し、配布する予定。

- ・多言語化されているものはあるか。

⇒現在はない。多言語化する場合は、既存のものに各言語を追加するのではなく、新たに言語毎のものを作成した方がよい。区としてもできるだけ多くの言語で対応できるよう検討する。

#### (2) 避難所運営のあり方

- ・避難所において、外国人の食事や宗教的背景を理解してもらうためには、避難所運営のリーダーとなる日本人と外国人コミュニティのリーダーが事前にコミュニケーションを取っておき、相互理解の関係を築いておくことが重要。

- ・災害時多言語情報作成ツールのような便利なツールを実際に活用することが重要。  
このようなツールの認知度は現状では低く、有効に活用していくための方法を検討したほうがよい。

### (3) 避難所登録カードについて

- ・多言語対応されていないため、多くの外国人が記入できない。少なくとも英語版が必要である。
- ・どこの国籍の人がどこの避難所にいるかを確認するために国籍欄が必要である。
- ・自分が理解できる言語を記入する欄が必要である。
- ・家族等が離れ離れになった場合は、登録カードの情報を基に互いの安否確認を行うのか。  
⇒基本的には事前に家族の中で集合場所を決めておいていただく。また、Web171等を活用し、安否確認を取る方法もある。登録カードの情報に基づいた他の避難所への安否確認は現実的ではない。
- ・外国人住民には単身者が多いため、友人との連絡がとれないと不安になってしまう。  
家族の中での集合場所の取り決めや、Web171の使い方等をあらかじめ周知しておくことが重要。
- ・被害想定では通信面の被害は少なくなっている。発災から2～3日たてば携帯電話で連絡ができるので、充電の確保が必要となる。
- ・避難所は移動してよいのか。  
⇒移動は原則として認められない。避難所は行政として一人一か所に必ず用意しなければいけないもので、避難者一人一人の希望で移動を認めるとその管理がしきれなくなってしまう。
- ・避難所同士の連絡会はあるのか  
⇒隣同士の学校など、運営に直接関連する避難所同士では情報交換を行っているが、一般的に情報共有する場はない。ただし、発災後2～3日経過すると、災害対策本部には安否情報も含めある程度の情報が集約される。
- ・発災数日後に状況が落ち着いてきた時に、外国人が孤立してしまった場合や、大使館と連絡を取りたい時にどうするかというような、外国人に対するアプローチを避難所運営管理マニュアルに入れてほしい。
- ・一般の旅行者は一時滞在施設と避難所の違いが理解できない。地震が発生したら混

乱して大勢が一斉に避難所に押し寄せてくるのに、それを仕分けするのは困難。

⇒大久保では2つの商店街の理事長、大久保駅と新大久保駅と避難誘導、一時滞在施設としての対応の仕方の検討を始めている。

#### (4) 避難生活における配慮

- ・避難所運営管理マニュアルにはムスリムの方の食事や生活に関する配慮についてが載っていない。
- ・避難所運営管理協議会のリーダーの方と外国人コミュニティのリーダーで事前にコミュニケーションを取るなど、事前の相互理解を得ておくことが最も重要。そこでの議論の中で必要な物が挙がってくる。
- ・大久保のように避難所開設訓練などに外国人に参加してもらい、意見交換をしておくことが重要。
- ・事前にワークショップなどでムスリムの方にも入ってもらい、互いのことを知るような経験を積み重ねていくことが重要。
- ・日本人と外国人との相互理解は長期的な視点で進めていく一方で、摩擦がおきたときにクッションとなるような双方のリーダーを作っていかなければならない。

#### (5) リーダーの育成について

- ・ワークショップなどを通じて、日本人と外国人双方について、防災のリーダーになるような人材の育成が現実的である。新しいシステムや仕組みを整備するよりも、災害時における対応力を持った人材をいかに育成するかというプランを考えた方が良い。

#### 6 中間報告に向けて

骨子(案)と作成スケジュールについて確認した。

#### 7 閉会